

## 「即位の礼」・大嘗祭に関する立教大学史学科学生の意識調査

日本史院生協議会

### はじめに

日本史院生協議会では立教大学史学科の学生を対象に、「即位の礼」・大嘗祭に関する意識調査を行った。その目的は次の二点にあった。第一に、各学生に、アンケート調査に答えるという作業を通じて、天皇制の問題についての自分自身の考えというものを意識してもらうこと、さらにこれを機会に、天皇制の問題を積極的に考えてもらうことである。第二には、我々が、調査結果から学生の意識の現状を把握することである。第二点目については二つの点を柱にした。一つは天皇の存在が彼等にどれだけ深く影響しているのか、またはしていないのかについてを、明らかにすることである。彼等は史学科の学生として、多かれ少なかれ天皇制の問題には接しており、その問題点については

耳にしているはずである。しかし多くの学生は、これまでことさら天皇の存在に疑問をもたずに成長してきたであろう。その成長の過程で身につけた、天皇制を受け入れている部分、特に普段は意識されていない部分を引き出して、天皇制が具体的にどのような形で人々のなかに浸透しているのか、あるいはしていないのかをみていきたいと考えた。もう一つは天皇の存在という現実的な問題を、歴史を学ぶ者としてどのようにとらえているのかという、歴史認識を明らかにすることである。これら二つの柱によって、今後歴史学の立場で我々は何をすべきか、何ができるのかを考えていきたいと考えた。

本稿では、こうして実施された意識調査の結果を公表するとともに、若干のコメントを加えることを目的とする。なお本調査は日本史院生協議会として準備・実行・集計したが、集計結果の整理には辻まゆみがあたった。本稿につ

いての文責は辻まゆみにあり、本稿が日本史院生協議会のメンバーの考え方を規制するものではないことを、お断りしておきたい。

## 一、調査方法

アンケート調査は、「即位の礼」の翌日、一月一三日（火）から一九日（月）までの一週間に行った。当初「即位の礼」が始まる前に調査を終了すべきであると考えたが、この時期に調査期間を設定したのは次の理由による。第一に、「即位の礼」が始まるまでに調査を終了するには、時間的余裕がなかったこと、第二に、実際に「即位の礼」が行われて関心が高まったところで、学生に天皇制の問題を考えてもらうことは、本調査の主旨に沿うものであることである。アンケート調査は、特定の学年・専攻などにかたよらず、広く史学科学学生にゆきわたるように、全ての概説・概論・講読・演習の授業時間内に行うことにした。そのため各授業の担当教員の方々には、事前に調査担当者が個別に協力を要請し、承諾を得た。ただし一部、休講などの事情により、実施できなかった授業もあった。アンケート用紙は記入後その場で回収することを原則とし、ほとんどこの方法で行った。しかし場合によっては授業後に読書室まで持って来てもらったこともあった。

表はアンケート調査の対象者数と回答者数についてまとめたものである。一九九〇年四月現在、立教大学史学科の学生総数は五六六名（女性三七八名、男性一八八名）であった。女性と男性の数を比べると、圧倒的に女性のほうが多く、全男性数は総数の三分の一となっている。この内、アンケートに回答してくれた人の数は、全体で二七八名（女性二〇四名、男性七一名、不明者三名）である。回答率（回答者数÷対象者数）をみると、一々三年生はコンスタントに五六、七％の回答率と

表 調査対象者数と回答者数

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	合 計
A 史学科学学生数 (対象者数)	130 (女83・男47)	134 (女91・男43)	142 (女102・男40)	160 (女102・男58)	566 (女378・男188)
B 回 答 者 数	73 (女53・男20)	76 (女64・男12)	80 (女60・男20)	46 (女27・男19)	278(女204・ 男71・不明3)
回 答 率 (B÷A, %)	56	57	56	29	49

※ 回収されたアンケート用紙の中には、性別の記入がないものが3人分あった。合計にはこれを含めたが、各学生別の内訳には不明分は除いてある。

「即位の礼」・大嘗祭に関する学生の意識調査（日本史院生協議会）

なっているが、四年生はほとんど授業をとっていない者が多いためか、三年生までに比べて回答率が落ちる。合計では四九％である。

二、調査結果

以下はアンケートの設問と回答結果である。数字はすべて、（その選択肢にまるをつけた人数）÷（回収できたアンケート数÷人数）とした。つまりアンケートに参加した全人数のうち、その選択肢に同感した人の割合を示している。なお本アンケートは、△複数回答可✓とあるもの以外は、選択肢の中から自分の考え・行動に最も近いものにするをつけてもらうつもりであった。しかしそのことをアンケート用紙に明記しなかったせいもあって、この点については徹底しなかった。また一人の回答用紙でも、設問によって答えていたり答えなかったりといったものもあったことを付け加えておく。

1 「即位の礼」が行われたことを知っていますか？

はい 八九％ いいえ 〇％

↓知っている人は日になちをお答えください

（正解 八八％）

2 大嘗祭が行われることを知っていますか？

はい 八八％ いいえ 一〇％

↓知っている人は日になちをお答えください

（正解 二五％）

「即位の礼」・大嘗祭ともに、その実施についてはほとんどの人が知っていた。しかし、実施日の把握については両者の間には大きな差がみられた。「即位の礼」については九割近くの人が正確な日になちを知っていたのに対し、大嘗祭については四人に一人となっている。両者の差は、調査の時点で「即位の礼」が既に行われていたこと、さらに「即位の礼」当日が「国民の休日」とされたことによるのであろう。

3 次の歴史的事実のうち、知っているものにまるを付けてください

付けてください

a 古代においては、即位儀は服装など中国風の様式で行われていた

b 大嘗祭は一四六六年以降九代二二一年の間行われていなかった

c 昨年一月七日に行われた践祚にともなう一連の儀式や、大嘗祭は現在の皇室典範にはなら規定がなく、明治期に制定された登極令に規定されていたものである

d 皇位の継承があった時には「即位の礼」を、天皇が死去した時には「大喪の礼」を行うことは、

現皇室典範に規定されている

a 二六%      b 一三%      c 二四%

d 三八%

(回答個数について)

四つ 三%    三つ 五%    二つ 二〇%

一つ 三六%    〇 三六%

これらは今回の天皇の即位に関して、主に歴史学の立場から呈示されたものである。研究者や学会は出版物や講演会等を通じて、これらを広く一般に向けても訴えかける努力をしてきた。しかしながらこの結果は、史学科の学生にすら、それらがあまり受けとめられていなかったことを物語っている。

4 「即位の礼」について、どのように思いましたか？

a あの程度でよい 三八%

b もっと盛大に行うべきだった 二%

c もっと小規模で行うべきだった 二六%

d 行うべきではなかった 一一%

e 関心がなかった 一五%

f その他 九%

今回の規模で問題はないとした人が最も多いが、半数には遠く及ばない状況である。もっと盛大にとした人が二%

史苑(第五二巻第一号)

なのに対し、もっと小規模に、あるいは行うべきではなかったとした人が合計三七%となっている。これは現状を肯定した人とはほぼ等しい数値である。

5 「即位の礼」の当日、これに関して何かしましたか？

a 集会に参加した 一%未満

b 祝賀会に参加した 〇%

c パレードを見にいった 一%未満

d テレビ中継を視ていた 三九%

e 特に何もしていない 四八%

f その他 一五%

集会・祝賀会への参加やパレードの見物といった、積極的な行動を起こした人はほとんどなかった。「その他」は一五%あるが、具体的に記入されたものをみると、この内の多くは広い意味でeに入るものである。したがって何もなかった人が実際には半数以上を占めていると考えられる。テレビの視聴率は高い。関心は低くはなかったといえる。

6 大嘗祭について、どう思いますか？

a 「皇室の私的行事」として行う

b 「皇室の公的行事」として行う 四二%

「即位の礼」・大嘗祭に関する学生の意識調査（日本史院生協議会）

べきである

二三%

c 「政府の国家行事」として行う

べきである

二%

d 行うべきではない

一三%

e 分らない

一一%

f 関心がない

七%

g その他

二%

今回のやり方を支持したのは二三%にすぎず、大嘗祭については「即位の礼」よりもさらに、その位置付けに不満を感じている人が多かったことがわかる。「皇室の私的行事」として行うべきという意見が最も多い。「政府の国家行事」を選択した人は極少数であり、これに対して、行うべきでないとした人は一割強となっている。このように、今回の大嘗祭への反発は非常に強いことがわかる。

7 大嘗祭の当日、これに関して何かするつもりですか？

a 集会に参加するつもりである

一%未満

b テレビ中継を視るつもりである

二一%

c 特に何かするつもりはない

七四%

d その他

五%

積極的な行動は、「即位の礼」の場合と同じくほとんどしない。しかしテレビを視るという人が減り、何もしない

という人が大多数をしめている。これは大嘗祭の中核である「大嘗宮の儀」において、天皇自身による祭祀は「秘儀」という、儀式の性格によるものであろう。

8 皇室についてどのような印象をお持ちですか？

a 身近に感じる

三%

b あこがれる

三%

c 尊敬している

四%

d 反発を感じる

一五%

e 何とも思わない

五八%

f その他

二〇%

何とも思わないという人が多数を占めた。「身近」・「あこがれ」・「尊敬」を選んだ人の合計よりも、反発を感じる人の方がやや多い。「その他」が多くなっているが、印象というよりは、天皇や皇室に対する考え方を記入している人が多かった。

9 皇室関係の報道についてどう思いますか？

「I 量について」

a 今のままでよい

三七%

b もっと増やすべきである

六%

c もっと減らすべきである

三五%

d 分らない

七%

e 関心がない

一三%

〔Ⅱ 報道姿勢について〕

- a 今のままでよい 三〇%  
 b もっと敬意をあらわすべきである 一%  
 c もっと批判的な姿勢を取り入れるべきである 三六%  
 d 分らない 六%  
 e 関心がない 九%  
 f その他 一八%

Ⅰについては、現状を維持すべきとする人の数と、減らすべきとする人の数が並んでいる。Ⅱについては、批判的な態度が必要であるとしている人が最も多い。現状維持派もこれに次いでいる。ここでも「その他」が多いが、その意見をみると、画一的な内容や、特別扱い・敬語の使いすぎ、芸能人扱いにうんざりしていることがわかる。また、報道の自由の保証や、公平な（客観的な、あるいは事実を事実として放送するという）態度を求める声も少なくない。

10. 天皇および皇族に対する「陛下」・「さま」や敬語について

〔Ⅰ どう思いますか？〕

- a 使うべきである 二六%  
 b 使うべきではない 三二%  
 c どちらでもよい 四〇%

d 分らない 三%

↓ア) 使うべきだと答えた人は、自分の考えに近い理由を選んでください

- a 国家の象徴として、一般の国民と区別されるべきだから 一七%  
 b 高貴な家柄の人々だから 三%  
 c 一般的に使われているから 四%  
 d その他 三%

↓イ) 使うべきではないと答えた人は、自分の考えに近い理由を選んでください

- a 人はみな平等だから 一七%  
 b 特に尊敬しているわけではないから 九%  
 c 天皇制には反対だから 五%  
 d その他 四%

〔Ⅱ どのように使っていますか？〕

a 天皇や皇族の話になると自然と改まった言葉遣いになる 五%

b 敬語は使わないが、天皇や皇后というときには「陛下」が自然にでてくる 一一%

c 日常的に「陛下」・「さま」や敬語は使っていない 六九%

d その他 五%

「即位の礼」・大嘗祭に関する学生の意識調査（日本史院生協議会）

Iでは、どちらでもよいという人が最も多く、使うべきでないとした人がこれに次いでいる。使うべきだとした人の理由としては、国家の象徴としての役割上必要であるという意見が、他を大きくひきはなしている。一方使うべきでないとした理由をみると、人はみな平等であることが第一となっている。

IIでは、日常において天皇・皇族に対して敬語は使っていないとした人が、多数を占めた。特にIでaとした人でも、実際には敬語を使っていないという場合が少なくなかった。一方、自然と敬語や「陛下」がでてくるといふ人は、aとbを合わせて一六％であった。

11 天皇制はどうなるべきだと思いますか？

- a 天皇を国民の象徴と位置付けて  
現状を維持すべきである 四五％
- b 天皇の国家における役割を強化  
すべきである 一％未満
- c 天皇は国家との関係を切るべきだが、  
何らかの権威として存在すべきである 一三％
- d 天皇および皇族は全て一市民となる  
べきである 二一％
- e 分らない 六％
- f 関心がない 四％

g その他 一一％  
現状維持を選択した人が最も多く、半数近くを占める。だいたいパーセンテージは下がるが、これに次いで多いのが「一市民」派である。天皇制と国家との公的な関係の廃止を前提とする、cとdを合わせると三四％になる。これに対して、天皇の国家的役割の強化を求める声は、ほとんどない。

12 今後天皇制はどうなっていくと思いますか？

- a 現状のままでいくであろう 六七％
- b 現行憲法のままで天皇の役割が  
強化されるであろう 一二％
- c 憲法が改められ、元首の地位が  
明確になるであろう 二％
- d そう遠くない将来に天皇制は  
消滅するであろう 四％
- e 分らない 一〇％
- f 関心がない 一％
- g その他 四％

設問11の自分の希望に対して、設問12では実際にはどのようなに動いていくとみているのかをきいてみた。設問11では現状維持派は半数に満たなかったが、ここでは大多数の人が現状維持とみている。また設問11では天皇の国家にお

ける役割強化を望んだ人がほとんどいなかったのに対し、ここでは改憲の可能性はないとしながらも、法律の解釈の仕方によって、天皇の役割強化がなされることを懸念する声がみられる。さらに天皇制の消滅となると、設問11のcとdがこれを前提とするものと考ええると、三分の一以上の人が望んでいたことになる。しかし現実問題としては、ほとんど期待できない状況にあるととらえている。これらのことは、天皇制をめぐる日本の社会状況は、自分がよいと思っている方向には動いていかないと考えている人の多いことを意味している。

13 天皇制がなくなったとしたら、日本はどうなると  
 思いますか？

- a 何も変わらないであろう 三五%
- b 国家としてのまとまりがなくなる 六%
- c なんとなくさびしいと感じる 三三%
- d より自由で平等な社会となるであろう 六%
- e 分らない 一一%
- f 関心がない 一%未満
- g その他 一一%

天皇制がなくなったとしても、何も変わりはないと考える人が最も多い。これとはほぼ同数なのが「さびしさを感じる」としている人たちであり、彼等は政治的・社会的問題として天皇の存在をとらえているのではない。まず、感情のレベルでとらえているという点が重要である。さらにbやcを選択した人が少数であることからみても、天皇は良くも悪くも政治的・社会的影響力をもっていないという認識を、全般的にみえてとることができる。

14 これまで天皇制について考えたことがありますか  
 (複数回答可)

- a 天皇制に関する本を読んだことがある 三五%
  - b 天皇制に関する講演会を聞きに行ったことがある 七%
  - c 天皇制についての勉強会や集会に参加したことがある 一八%
  - d 関心を持っており、個人的にはいろいろ考えている 四七%
  - e 特に考えたことはない 二三%
- 講演会や勉強会・集会に参加するという積極的な行動をとる人は少数である。しかし特に考えたことのない人は二三%にすぎず、積極的とは言えないまでも、それなりの関



「即位の礼」・大嘗祭に関する学生の意識調査（日本史院生協議会）

心はもっている。

15 天皇制問題について何をしたいと思いますか？

- a 天皇制についての歴史的事実を 五一％  
b 学んでおきたい

c 天皇制問題については関わりたくない 四％  
d 特に関心したいとは思わない 三八％  
e その他 三％

歴史的知識を身につけたいという欲求は、半数以上の人がもっている。しかしそこからさらに発展させて、社会に対して訴えていきたいとする人は極わずかである。その一方で、積極的であれ消極的であれ、何もしたくないとした人は、cとdを合わせて四二％にも及んでいる。

16 天皇制について大学でどのように学びたいですか？

- a 特別講座を設けてほしい 一二％  
b 平素の授業の中で積極的に取上げてほしい 三二％  
c 勉強会をやってみよう 七％  
d 講演会を開いてほしい 一二％  
e 大学で特に学びたいとは思わない 四四％

f その他 二％

特別講座・講演会・勉強会といった特別なことは希望していないことがわかる。最も多くの人たちが選んだのが、大学で特に学びたいとは思わないという答えであった。天皇制の問題に大学が取り組むことを、必要とは思っていないのである。

17 史学科学生としての自分の勉強と天皇制との関係についてどのように考えますか？

- a 自分の勉強は、天皇制の問題とは結びつかない 三五％  
b 天皇制は学問的な関心の対象ではあるが、現実的な問題とは結びつかない 二一％  
c 自分の勉強は現実的な天皇制の問題とも結びついている 二二％  
d 分らない 一〇％  
e 関心がない 五％  
f その他 五％

現実の天皇制の問題との結び付きをはっきりと認識している人は二二％であり、少数派となっている。

18 「即位の礼」・大嘗祭あるいは天皇制について、考えていることや感じていることがあれば書いてください（回答有り 五一％）

多様な意見が寄せられた。一人の意識の中でも、幾つかの異なった認識がからまりあって天皇制観を形成している。天皇をめぐる問題の複雑さから、一貫した論理を自分の中に確立しきれないでいる人も多い。様々な意見からよみとれる意識のうち、主だったものを整理してみると、次のようになる。

①天皇が非常に遠い存在となっていて、ナマ身の人間という意識がない。天皇の存在は所与の前提となっている人もある。「天皇は悪くないがマスコミ（政治家・宮内庁）がいけない、利用している」という意識があり、ここから「天皇はかわいそう」、「自由がなくて気の毒」だから「人権の保証を」といった意識が生じている。

②政治的には天皇に何の期待もしていない。むしろ天皇は政治に関与しない方がいいと考えている。天皇の位置付けがあるとすれば、「伝統文化」の継承者であり、これに期待をかけている人は少なくない。その意味において天皇制の存続を主張する人もいる。

③天皇に関する行事・式典、特に今回の皇位継承にともなう一連の儀式について、それが国家すなわち国民のためのものであるとは考えていない。こうした儀式は皇室のための行事であるにとらえている。したがって、「私的な出費に税金を使い込んでいる」ことに対する不満は非常に大

きい。また、「警備等で一般市民に迷惑をかけるな」といった意見も多くみられた。

④天皇や皇族に対する特別扱いへの不満がある。人間の平等の原則を無視している点に問題を感じている。

⑤日本の近代史を顧みて、天皇を問題のある存在としてとらえている。それは日本国民を単に近代天皇制の被害者としてのみとらえてのことではない。日本国民がまた加害者でもあったという認識をもっており、アジア・太平洋地域の人々への配慮が必要であると考えている。

⑥テロなどの暴力的な行為に対しては、それが左翼・右翼いずれの行動であっても、嫌悪している。

本調査は以上のような結果を得るに至った。詳細な分析は今後の課題として、ここでは、史学科学生の天皇制をめぐる歴史認識について、簡単にまとめるにとどめたいと思う。

学生の多くは天皇をめぐる問題に関心を持っていた。調査結果を全体的にみると、二つの代表的な立場のあることがわかる。ただし、学生たちは常に特定の立場のグループに属するとは限らず、設問によっては違う立場にまわることもある。その一つは現状維持的な立場のグループである。彼等は天皇の存在が我々の生活を支配し、脅かすような状

「即位の礼」・大嘗祭に関する学生の意識調査（日本史院生協議会）

況は、既に克服されたという認識をもっている。さらに天皇をいまだに非人間的な存在として受けとめている人もいる。人間性というものが払拭された天皇は、人間性において中傷されることもなく、汚れない。天皇個人のナマの意見は公表されないもので、天皇自身はいも悪いもなく、批判の対象ではないのである。こうしたことは、彼等が天皇制を現実的な問題として意識することを阻止する方向に作用しているのである。そしてもう一つは天皇制に反対する方向で、現状に批判的な立場をとるグループである。彼等が一つの勢力となっていることは、調査対象が史学科の学生であるという特殊性に由来するものであろうか。

しかし天皇制の問題に関して、積極的な行動を起こしたり、起こしたいと考えている人はわずかである。現実的な天皇制の問題と自分の勉強とが結びついてる人も少数となっている。

おわりに

敗戦後に天皇をどうするべきかについて、日本国民は、自分たちの問題として、真剣に考えるという作業をしてこなかった。そして今回の一連の儀式についても、法的根拠もないまま、部分的に修正はしたものの、戦前の形式を踏

襲することを許してしまった。現時点で重要なことは、国民がまさに自分自身の問題として、天皇の存在をどうとらえるのか、またどうすべきなのかを考えていくことである。そして徹底的に国民レビューで議論していかなければならない。その基礎的な作業を経ないでは、日本の市民社会は成熟していかない。少なくとも、天皇制の問題の進展は、その大きな契機となるであろう。

そのために我々が考えなければならぬのは、歴史学は現実的な課題に対してどのような役割を担うことができるのか、何ができるのかということである。敗戦後歴史学の諸先輩は、「封建制」の打倒というきわめて現実的な課題と対峙しながら、歴史の研究を進展させてきた。しかし現代社会において、歴史学の占める位置は変わってきている。若手の研究者や学生には現実的な問題への関心が、必ずしもあるわけではない。もし、それが大勢を占めているのであれば、歴史学は現代社会への影響力を失いつつあるのであろうか。

本調査では、史学科学生総数の約半数の人たちからの回答を得ることができた。これは我々が今後こうした天皇制問題を考えたり、あるいは歴史学の在り方を問うに際して、有効な資料となる。またこの調査をきっかけとして、授業で、あるいは友人同士で天皇制についての話し合いがもた

れたこともあったと聞いている。こうしたことから、我々の今回の試みはそれなりに成功したといえるのではないかと自負している。この成功は、何よりもアンケート調査に応じてくれた学生諸君と、我々の調査に対し理解を示し、貴重な授業時間をさいてくださった先生方、そして史学科の職員の方々の協力なしにはありえないことである。最後になったが、心よりお礼申し上げる次第である。そして本稿は、回答を寄せてくれた学生諸君の誠意に応えるために、諸君にお返しするものであることを特筆しておきたい。これがさらに議論の機会を提供することになってくれればと祈念している。

〔付記〕

(1) 本稿は、一九九〇年度立教大学史学会大会に

おいて報告したものに、若干手を加えたものである。

(2) 一九九〇年一二月月上旬、立教女学院短期大学の全学生を対象に、島川雅史氏が本調査と同様のアンケート調査を行っている。その二〇の設問の内、八つを本調査の設問より引用している。島川氏よりその集計結果を見せていただいたところ、立教大学史学科学生の方が、天皇制の問題に関してより高い関心を示すとともに、より批判的な姿勢をとっていることが明らかとなった。なお島川氏の調査結果については、『立教女学院短期大学紀要』に掲載を予定されているとのことである。

(文責 辻まゆみ 立教大学史学専攻前期課程)